

ルターとドイツ語 ルター訳聖書のドイツ語とその新高ドイツ語成立への影響

著者	多田 哲
雑誌名	ルター研究
巻	16
ページ	163-189
発行年	2019-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1075/00000629/



ルターとドイツ語

——ルター訳聖書のドイツ語とその新高ドイツ語成立への影響

多田 哲

一 はじめに

現代標準ドイツ語とされている新高ドイツ語の成立は、これまで、ルターの翻訳によるドイツ語聖書が決定的な役割を果たしたことによると考えられてきた。確かに、グリムやゲーテはルターのドイツ語が近世のドイツ語を生み出したと評価している。しかし、二〇世紀に入り、このようなルターのドイツ語に対する評価は過大ではないかという批判が出されるようになった。ヴェルナー・ベッシュは『ドイツ言語史におけるルターの役割』(Besch, W. 1999)の中で、ルター聖書がドイツ語史にとって大きな出来事であったことは確かであるものの、ルター聖書の伝播と言語統一を同一に語ることは慎重な姿勢を示している。すなわち、話し言葉、書き言

葉、聖書の言葉といった異なる段階を想定する必要がある、ルター聖書が広がったことを根拠にルターのドイツ語が広がったと考えるのは早計であるということである。

ルター聖書のドイツ語が近世のドイツ語を生み出したとする評価は、ルターの宗教改革が宗教のみならず社会全体の改革であったという評価に連動している。しかし、この評価は大雑把であって、言語学的には音と書記と、形態との関係、統語や意味、語用といった分析が不可欠である。当時は識字率が低く、正書法も定まっていないため、音と書記とのずれもある。書き言葉であるルター聖書のドイツ語が、話し言葉である当時の各ドイツ語に具体的にどのような影響を与えたのかは、実際にそう簡単に判断できるものではないのである。

ルターのドイツ語の研究はドイツ語史において様々に研究がなされてきた。それらによって、ルターのドイツ語がザクセン官房の書記法に依拠していることや、活版印刷の要地であった東フランク地方のドイツ語が影響していること、また、ルターの生まれ育った上部ザクセン語の語彙が多く含まれていることなどが明らかにされている。しかし、ルターのドイツ語がどのように他の地域へ受容されていたかは研究がまだ少なく、そのことがルターのドイツ語の過大評価につながっていると考えることができる。

本論文では、まず、ドイツ語史を概観し、特に、一六世紀の音と書記との関係に触れながら、その中でルターのドイツ語がいかなる位置にあるかを、主にドイツ語学の立場から論じようとするものである。

二 ドイツ語史の概観

ドイツ語は大きく高地ドイツ語と低地ドイツ語とに区分される。概ね、高地ドイツ語はドイツ南部、オーストリア、スイスなどアルプス北側の標高の高い地域が言語圏となっている。そのため、高地ドイツ語と呼ばれる。低地ドイツ語はドイツ北部やオランダ、ベルギーなど、北海やバルト海沿岸、ライン河岸などの標高の低い地域が言語圏となっている。そのため、低地ドイツ語と呼ばれる。

高地ドイツ語と低地ドイツ語とを分ける概念上の境界線はベンラート線と呼ばれる。デュッセルドルフのベンラートを起点にフランクフルト・アン・デア・オーダーに至るこの境界線より北側が低地ドイツ語圏、南側が高地ドイツ語圏であるが、もちろん、実際の言語境界は複雑に入り組んでいる。ベンラート線は、線というよりも帯であり、かなりの幅を持っている。この帯状の地域を、特に、中部ドイツ語圏と呼ぶ場合もある。その言語は高地ドイツ語と低地ドイツ語との両方の特徴を有している。また、帯の南岸線をシュパイアー線として区別する場合もある。

高地ドイツ語と低地ドイツ語とは、もともとゲルマン祖語の西方言に由来するとされ、西ゲルマン諸語に分類されている。西ゲルマン諸語は、他に、英語、フリジア語などがある。また、現代ではオランダ語はドイツ語と別言語として分類されているが、これは低地ドイツ語から分化したもので、一六世紀の時点では低地ドイツ語の

方言とみなす立場と中期オランダ語としてみなす立場がある。同様に、ルクセンブルク語もドイツ語の方言とみなす立場がある。これらのことは、言語と方言との定義が明確でなく、しかも、常に変化している言語を固定的に捉えることの難しさを表している。

また、ゲルマン祖語からは、他に、北方言から分化したスウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語、フェーロー語、アイスランド語などがあり、アイスランド語は現代においてもかなり古い特徴を保存している。あるいは、現代では廃れてしまったものの、東方言から分化したゴート語、ブルグント語、ヴァンダル語などがある。このうち、ゴート語はア rius 派の司教ウルフィラによる聖書翻訳が残されている。ウルフィラはゴート語の書記のためにゴート文字を考案し、聖書を翻訳したのである。そのうち、福音書のかんりの部分が銀文字写本によって伝わっており、ゴート語の研究、および、ゲルマン語派の研究に欠かせない史料となっている。ウルフィラ聖書はゲルマン語派のまとまった書記史料として最も古い時代のものである。ゲルマン祖語に遡る特徴を多く有しており、印欧比較言語学においても貴重な史料である。

ドイツ語は、三世紀頃まで英語やフリジア語と未分化であった。この頃はドイツ語という言語がまだ存在せず、古ザクセン語、古フランク語、古バイエルン語、古アレマン語などが別々に存在していた。古ザクセン語のうち、ブリテン島に移住した人々が使用していた方言がサクソン語と呼ばれ、アングル語と共に古英語を形成した。英語で、英語を意味する English は「アングル人の言葉」を意味するアングル語の *Englisc spræc* に由来する。

六世紀頃から第二次子音推移という規則的な子音の音変化が起こり、高地ドイツ諸語が発生した。ベンラー

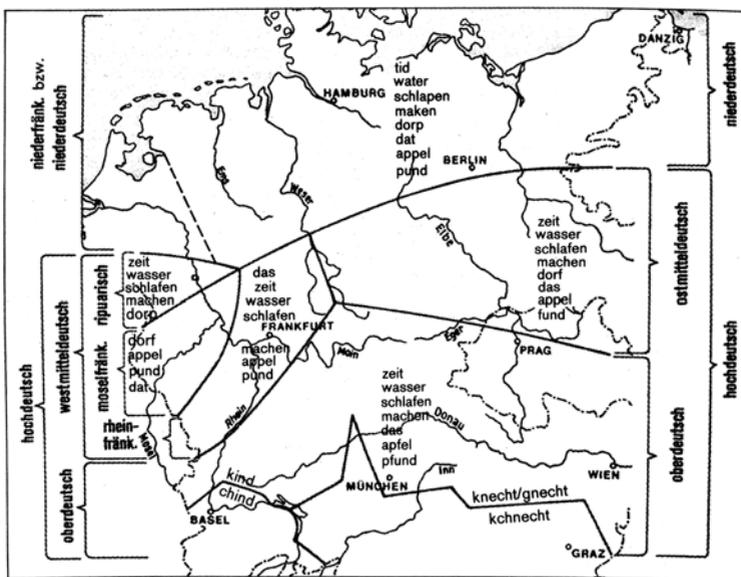


図1 第二次子音推移 (König 1978, S. 64)

ト線は、この第二次子音推移の有無を概念化したものである。第二次子音推移はアルプス地方で発生し、約三〇〇年かけてベンラート線まで到達して停止した。最も第二次子音推移の影響が強かったスイスの古アレマン語は、最高地ドイツ語と呼ばれている。この地域はスイスの中でも特に標高の高い山岳地帯で、そのため、最高地ドイツ語と呼ばれる。この時代、東フランク王国がドイツ語圏で大きな勢力であったため、古高ドイツ語が古高ドイツ語の代表的言語と見なされている。ドイツ語で最も古いまとまった書記史料が残されているのが古高フランク語で八世紀頃に成立した作者不詳の『ヒルデブランドの詩』や九世紀頃に成立したヴァイセンブルクのオトフリートによる『福音書』などがある。ヴァイセンブルクのオトフリートはマインツ大司教管轄下のヴァイセンブルク修道院の修道士と見なされおり、その『福音書』は聖書翻訳ではなく、福音書をモチーフにした脚韻詩である。

一二世紀、ドイツ南西部の低地アレマン語圏で吟遊詩人たちによる叙事詩や抒情詩などの文学が発展したことで、低地アレマン語が中高ドイツ語の代表的言語と見なされている。低地アレマン語は、低地と名が付いているが高地ドイツ語に属している。この時期の有名な文学作品には『ニーベルンゲン』や『パルツィファル』などがある。

この時代、ドイツ北部でも低地ドイツ語の文学が生まれ、古低ザクセン語に変わって中低フランク語が中低ドイツ語の代表的言語と見なされるようになったが、一三世紀にハンザ同盟の広がりによって、中低ザクセン語もドイツ北部の主要言語となった。低地フランク語のうち、低地地方（ネーデルラント）のフランク語が次第に分化して中期オランダ語となって、現代オランダ語の元となった。この時期の有名な文学作品としては『狐ラインケ』や『ザクセンシュピエーゲル』などがある。

一五世紀頃になると高地ドイツ語圏で長母音が二重母音化する母音推移が起こり始め、初期新高ドイツ語期に入る。この母音推移は高地フランク語から起こったと考えられている。例として、/u:/ > /au/ (ex. *ûß* > *aus*), /i:/ > /ai/ (ex. *zit* > *zeit*) を挙げる。ルターが活動し、宗教改革が起こった一六世紀はこの初期新高ドイツ語期の範囲である。初期新高ドイツ語は中高ドイツ語から新高ドイツ語への過渡期にあたる。中高ドイツ語から初期新高ドイツ語への移行に関して、中高ドイツ語から初期新高ドイツ語への移行を示す特徴として、フライシャーはこの母音推移による新たな二重母音の出現をフォン・ラウマーは初期新高ドイツ語の本質的特徴であると述べている。ただし、その伝播には地域差、時間差が大いにあり、各地域の言語的多様性はかなり幅広い。初期新高ドイツ語は過渡的な状態であるため、同一史料内であっても中高ドイツ語の

特徴と新高ドイツ語の特徴との両方が現れている場合もある。資料1に示したのは、シュヴェービッシュ・ハル（現在のバーデン・ヴュルテンベルク州に位置する都市で、当時は帝国都市）の宗教改革を進めた神学者ヨハネス・ブレントが一五四三年に作成した『シュヴェービッシュ・ハル教会規定』の一部を抜粋したもので、聖句の引用である。この例では三行目の最後の単語「**vff**」と五行目の単語「**auff**」はともに現代標準ドイツ語における「**auf**」に当たる単語であるが、前者は初期新高ドイツ語の特徴である二重母音化をせず、中高ドイツ語の形態で記されている。このような特徴は、一五四七年に作られた『ヴュルテンベルク総会規定』においても非常に多く見つけることができる。

その後、一七世紀に入ると、高地ドイツ語圏が北に拡大し、低地ドイツ語圏を圧迫し始め、プロイセン王国の拡大と共に中部ドイツ語が中心となって新高ドイツ語が

**Wer nun sich selbs
nidrigt / wie dis kind / der ist der gröst im
Himmelreich / vnd wer ein sollich Kind vff
nimpt in meiuē namen / der nimpt mich
auff.**

Wer nun sich selbs
nidrigt / wie dis kind / der ist der gröst im
Himmelreich / vnd wer ein sollich Kind vff
nimpt in meinē namen / der nimpt mich
auff.

「さて、自らをこの子どものように低くするものは、天の国で最も偉大である。そして、私の名によってこのような子どもを受け入れるものは、私を受け入れるのである。」

資料1 Brenz, J. (1543), Ordnung der Kirchen / inn eins Erbarñ Raths zu Schwäbischen Hall / Oberkeit vnd gepiet gelegen, Bl. Bii. Schwäbisch Hall, Pancratium Duecken.

形成される。これが現代標準ドイツ語となった。現代標準ドイツ語は一九九六年に新正書法が定められ、例えば、ßの表記がそれまでの歴史的な綴りから母音の長短を表す機能的なものに変更された。ßは「エスツェット」という名前が示す通り、sの異体字であるrとnの異体字であるwとの合字であり、元々△wと△wと異なる書記素であった。なお、言語学では△vで括弧することでそれが書記素であることを示す。同様の記号として、「」は音を、／は音素を、～は形態素を示すものとして使われる。Schloßやmußのように本来の△wであったものでも、新正書法では短母音の次に来るrは全てsへと表記するように改められた。そのため、SchloßはSchlossに、mußはmussと表記されることになったのである。あるいは、スイスの正書法のように全くßを廃止した表記もある。

現代標準ドイツ語の統語的な特徴としては、属格の衰退がその代表例である。ドイツ語には元来、主格、属格、与格、対格という四つの文法格があるが、現代標準ドイツ語では属格があまり用いられなくなり、他の方法で言い換えが進んでいる。属格目的語を取る動詞は、与格や対格、前置詞句を目的語に取るようになり、属格支配の前置詞も与格や対格支配に変わりつつある。例えば、動詞vergessen「忘れる」は属格目的語を取る動詞であったが、現代では対格目的語を取るようになっていく。ただし、定型表現として古い言い方が固定化され、Vergiss meiner nicht!「私のことを忘れないで」と属格目的語が用いられる場合もある。もう一つの例は、過去形が用いられなくなってきたことである。現代の話し言葉では、いくつかの頻度の高い動詞を除いて過去形が用いられず、現在完了形で過去が表現される。このことは南部において特に顕著で、全く過去形を用いない方言もあるほどである。現代標準ドイツ語において過去形と現在完了形とは共に過去の時制を表し、差異はなくなっている。

いる。

三 話し言葉と書き言葉

話し言葉と書き言葉を混同してはならないというのが歴史言語を扱う上での原則である。ルターの聖書翻訳は市井の人々の言葉を用いて書かれたと一般的に言われているが、文字で書記する以上、音と書記との関係に考慮しなければならない。

書記法が統一された結果としての正書法は単にその言語の音を表記するためだけではなく、語源的情報や統語的情報など、どんな音声的特徴かという以上の情報を含む整えられた書記独自の体系である。しかし、各言語によってどの程度それらの情報が書記によって表されるかについては様々であり、また用いる文字体系にも依存するのであるが、概ね二通りの態度がある。

一つは音素を基本とした書記である。これはすなわちほぼ読むように書くというものである。書記から音が容易に判ることが利点である反面、屈折語などでは同一語内で書記が不統一となる欠点がある。そして、もう一つは形態素を基本とした書記をたてるという立場である。これは反対に書記が統一的であると言えるが、書記から音が再現し難い場合が生じる。現在の標準ドイツ語正書法では一般的なラテン文字に加えて *a, o, u, v* の四つの特殊文字が使われている。書記体系としては形態素を基本としていると言える。例えば、*Wald* であり *Wal* では

なく、WälderよりもWelderではないのであり、これは形態素(wald)を基本としているからである。

初期新高ドイツ語期の書記法統一過程には大きく二通りの考え方があつた。一方は、ミュレンホーフ(Müllenhoff, 1863)で示されている皇帝権力の中核と結びついていたという説である。彼はザクセン選帝侯国の官庁語から帝国全体へと広がり初期新高ドイツ語の書記法統一がなされたと考えた。もう一方は、フリングス(Frings, 1941)である。彼は当時は辺境であつたブランデンブルクや現ポーランド領などへの東方植民によつて様々な地方から人が集まり、そこで各方言の平準化が起つたことから書記の統一へ向かつたとしている。しかし、これら両者には共に問題がある。すなわち、ミュレンホーフについては皇帝権力の強さに疑問を呈さねばならない。というのも、神聖ローマ帝国は小邦の集合体であり、皇帝権力は実質的に帝国全土には及んではおらず、領邦君主が実際には独立した君主として振舞つていたからである。その皇帝権力の弱さが宗教改革の一因ともなつたのである。フリングスについては話し言葉と書き言葉を同一に扱っている点で問題がある。上述の通り、話し言葉と書き言葉を混同してはならないというのが歴史言語を扱う上での原則であるから、フリングスの説について述べるときには、さらに、東方植民による話し言葉の平準化から書記にどのような影響を与えたかを史料から根拠づける必要がある。しかし、そうするための十分な史料を用意するのは困難である。

現代日本語では話し言葉と書き言葉とが同じであり、これを言文一致と呼ぶ。すなわち、話しているように書くことができ、書いているように話すことができる。しかし、戦前までの日本語は口語と文語とに分かれており、口語は現代日本語とそれほど異なつていなかったが、文語は古文の特徴を残すもので、日常の会話では使われることが稀であつた。まさに、口語と文語という呼び方が話し言葉と書き言葉との不一致を示している。

話し言葉は生きた言語として常に変化していくのに対し、書き言葉の変化は相対的にかなり遅く、必ず差が生じる。あまりに言文の乖離が進むと、言文一致が起こる。そこから、また徐々に両者の差が広がり始めるという関係にある。例えば、英語の正書法は本来の文字の音価と実際の発音とが乖離しているが、これは一五世紀一七世紀ごろに起こった大母音推移という激しい音変化以前の綴りが書き言葉に保存されているからである。

例として、欽定訳 (King James Version) 聖書の「主の祈り」の冒頭部は *Our Father which art in heaven* となっているが、*our* 動詞の直説法現在二人称単数形が *is* である以外は現代英語と同じである。ただし、読み方は現代英語と異なり、大母音推移以前の音である。

歴史的言語資料を扱う場合、言文が不一致であるとすれば、どのようにして当時の音を把握することができるのであろうか。もちろん、現代のように音をそのまま記録することはできなかったもので、歴史的言語資料とは必ず書記資料である。この問題に取り組むのが比較言語学という分野である。話し言葉と書き言葉とは、異なっているとと言っても全く無関係ではなく、相互に関連している。また、話し言葉と書き言葉との距離は、近づいたり離れたりを繰り返している。現代のように正書法が規定される以前は、書記の中に綴りの揺れを観察することができる。それゆえ、書記資料の年代や成立地、ジャンルを体系的に整理し、分析することで、当時の音を再建することができる。比較言語学では、さらに、古すぎて書記資料さえ残っていない時代の言語も再建することができる。例えば、図2 (次頁) に記したように、ゲルマン祖語やインド・ヨーロッパ祖語など言語史料が皆無の言語まで遡ることができるのは、比較言語学の研究成果によるものである。

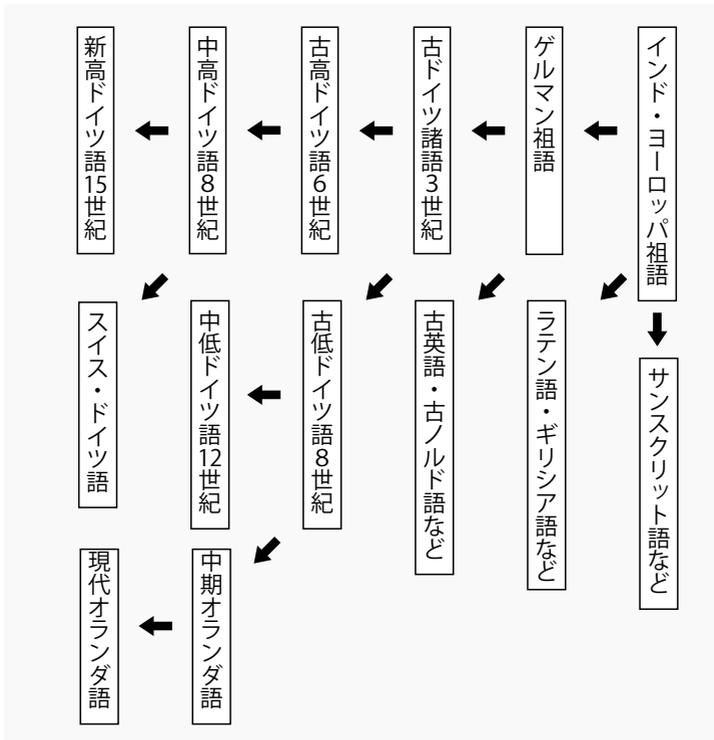


図2 ドイツ語の変遷

表1 ドイツ語の区分

低地ドイツ語	低地フランク語	低地ザクセン語	
中部ドイツ語	ライン・フランク語	テューリンゲン語	上部ザクセン語
高地ドイツ語	低地アレマン語	東フランク語	低地バイエルン語
	最高地アレマン語	高地アレマン語	上部バイエルン語

四 宗教改革期の「ドイツ語」

表1に示したのは、ドイツ語の区分を通時的に概念化したものである。これは概ね現代の方言区分にも対応しており、また、宗教改革期のドイツ語の区分にも概ね対応している。但し、宗教改革期は現代の方言差よりもそれらの違いは大きく、低地ドイツ語圏と高地ドイツ語圏は相互に通じないほどであった。

宗教改革期においてドイツ語と言った場合、それは一つの言語名ではない。ドイツ語を意味する *deutsch* あるいは *teutsch* は「民衆の」という意味の形容詞であって、固有名詞ではなかった。つまり、ドイツ語というのは「民衆語」のことであり、それぞれの地域にそれぞれの民衆の言葉として異なる「ドイツ語」があったのである。中世のドイツは名目的に神聖ローマ帝国の領域であったが、実際には三〇〇以上の領邦が複雑にひしめきあっていた。封建制度のもとで領民の移動は厳しく制限され、通商も各領主が課す関税によって妨げられたため、人や物の移動は少なく、小さな言語圏が無数にあるという状態であった。しかし、宗教改革期には貨幣経済や都市の発達によって人や物が中世よりも流動的になった影響で、書き言葉のある程度の平準化が起こった。通商や外交のためには相互に理解できる共通語が必要であるからである。以下に主な言語圏を挙げる。

ハンザ同盟の経済圏による言語圏。

ハンザ・ドイツ語。

ハプスブルク家領ネーデルラントの言語圏。

中期オランダ語。

ザクセン選帝侯官房を中心とした言語圏。

上部ザクセン語。

ライン伯領やプファルツ公領を中心とした言語圏。

ライン・フランク語。

ニュルンベルクやローテンブルクなどの都市を中心とした言語圏。

東フランク語。

ヴェルテンベルク公領やバーデンの諸領邦を中心とした言語圏。

低地アレマン語。

スイス同盟を中心とした言語圏。

スイス・ドイツ語。

ハプスブルク・オーストリア大公領を中心とした言語圏。

共通ドイツ語。

ドイツ騎士団による東方植民地を中心とした言語圏。

中期プロイセン語。

ブラハ官房を中心とした言語圏。

ブラハ・ドイツ語。

政治的、あるいは、経済的な中心地が言語圏を形成し、言語の統一を促進するという考え方は既出のミュレンホーフに示されている。宗教改革期におけるその中心がルターであるとミュレンホーフは述べているが、ベツシュ (Betzsch, 2014) は、このような複数の言語圏にまたがってルターのドイツ語が一樣に広がることは考えにくいと指摘する。

五 ルターの言語と活版印刷

ルターは、中部ドイツのアイスレーベンで生まれ、マンスフェルトで幼少期を過ごし、アイゼナハで青年期、エアフルトで大学時代を過ごした。これらは全てザクセン選帝侯官房を中心とした言語圏に含まれる。聖書を翻訳したヴァルトブルクや改革者として活動したヴィッテンベルクも同様である。ルターは旅行などを除いて生涯のほぼ全てを上部ザクセン語圏内で生活している。それゆえ、ルターの言語の基層は上部ザクセン語であると考えることができ、ヴォルフ (Wolf, 1980) はルターの言語使用について、上部ザクセン語圏の域を出るものではないと指摘している。ヴォルフによれば、ルターが用いた語彙の約八五％は上部ザクセン語に由来しながら、ルター以前から既に他の言語圏でも共通して用いられていたものであって、ルターの活動によって広まったものではない。上部ザクセン語圏は他の言語圏に囲まれるように中央部に位置していたことが、これほど多くの上部ザクセン語に由来する語彙が他の地域でも通用した一つの理由である。ルター自身は「新しく、聞き慣れない、使わないような言葉を使ったがることには用心するのだ。その手のやり方は良い語りに極めて反している」(WA TR 4, 4154) と述べている。

また、当時のルターの言語使用を把握する上で留意しなければならないのは、ルターの著作物のほとんどは印刷されたものであるという点である。一五二二年に出版された新約聖書、いわゆる「九月聖書」は、綴りの揺れ

Dem Euangelion ist eyn krieichisch wortt / vñ heyst auff deutsch / gute botschafft / gute meher / gutte newzeytung / gutt geschrey / dauon man singet / saget vñ frolich ist / gleych als do Dauid den grossen Holiath vberwand / kam eyn gutt geschrey / vnd trostlich newzeytung vnter das Jüdisch volck / das yhrer grewlicher feynd erschlagen / vnd sie erlöset / zu freud vnd frid gestellet weren / dauon sie singen vñ sprungen vñd frolich waren / Also ist dis Euangelion Gottis vñd new testament / eyn gutte meher vñ geschrey ym alle welt erschollen durch die Apostell / von eynem rechten Dauid / der mit der sund / tod vñd teuffel gestritten / vnd vberwunden hab / vñd damit alle die / so ym sunden gefangen / mit dem todt geplagt / vom teuffel vberweldiget gewesen / on yhr verdienst erlöset / rechtfertig / lebendig vnd selig gemacht hat / vnd da mit zu frid gestellet / vnd Gott wider heym bracht / danon sie singen / danken Gott / loben vnd frolich sind ewiglich / so sie des anders fest glawben / vnd ym glawben bestendig bleyben.

資料2 「新約序文」(Wittenberg, 1522)

Den Euangelium ist ein Griechisch wort / vnd heisset auff Deutsch / gute Botschafft / gute Mehre / gute Newzeytung / gutt Geschrey / dauon man singet / saget vnd frolich ist / Als da Dauid den grossen Holiath vberwand / kam ein gutt Geschrey vnd tröstliche Newzeytung vnter das Jüdische volck / Das jr grewlicher Feind erschlagen / vnd sie erlöset / zu freude vnd friede gestellet weren / Danon sie singen vnd sprungen / vnd frolich waren.

Also ist das Euangelium Gottes vnd new Testament / ein gute Mehre vnd Geschrey / in alle Welt erschollen / durch die Apostel / von einem rechten Dauid / der mit der Sünde / Tod vnd Teufel gestritten / vnd vberwunden habe / Vnd damit alle die / so in Sünden gefangen / mit dem Tode geplagt / vom Teufel vberweldiget gewesen / On jr verdienst / erlöset / gerecht / lebendig vnd selig gemacht hat / vnd da mit zu friede gestellet / vnd Gott wider heimbracht. Danon sie singen / danken / Gott loben vnd frolich sind ewiglich / So sie das anders feste glauben / vnd im glauben bestendig bleiben.

資料3 「新約序文」(Wittenberg, 1545)

が多くあるが、ルター自ら改訂した最後の版である一五四五年に出版された聖書では綴りが安定している。

資料2を見ると、*gute / gute* や *zu / zu*、*tod / todt*、*vnd / vñd* など、綴りの揺れが確認できる。また、*erlöft* や *vberwunden* のようにウムラウトが表記されていない。しかし、資料3を見ると、綴りが安定し、ウムラウトも表記されている。これらのような表記の違いは、著者の言語使用というよりも、むしろ、印刷工房の植字工による活字の組み方が影響していると、藤井(2009)や、齋藤(2010)は指摘している。ルター聖書については、一五二六年以降、ルフト(Hans Lufft)と

いう印刷業者がヴィッテンベルクでの印刷を担うようになった。綴りの変化が、ルターの言語使用の変化であるのか、それとも印刷業者の違いによるものであるのかを判断するのは慎重を要する。資料1と資料2とは、印刷業者が異なるので、使用している活字も異なっている。齋藤 (2010) は作業の効率化のためにウムラウトの表記をしない植字工と、作業を煩雑にしても活字の種類を増やしてその豊かさ売りにする植字工とがあり、刊本における書記の揺れは植字工に由来するものであると指摘している。それゆえ、当時の書記については印刷業者に依拠するところが大きく、活版印刷が盛んに行われていた東フランク地方の言語的影響を Besch (2014) も指摘している。

六 ルター聖書の受容

一五二二年に出されたルター聖書は、確かに当時の印刷物としては驚異的な広がりを見せた。ただし、ルターが訳した訳文がそのまま広がったわけではないことに留意しなければならない。上述の印刷業者による書記の改変は当時において通常のことであったことが各地で出版されたルター聖書を比較すると明らかである。

アウクスブルク版やシュトラースブルク（現在のストラスブル）版では、明らかに当地の言語に合わせた綴りに修正されているし、チューリヒ版では語形も高地アレマン語の語形に修正されている。これを Besch (2014) は「着せ替え」と呼んでいる。文字を着せ替えることで、中身の聖書を伝えようとしたということである。

また、低地ドイツ語圏である
 リューベック版に至っては、ブー
 ゲンハーゲンが中低ザクセン語に
 翻訳したもので、重訳になってい
 るのである。このことが示して
 いるのは、ルター聖書のドイツ語
 を上部ザクセン語から離れた言語
 圏の人々はそのままで理解するこ
 とができなかったということであ
 る。それにもかかわらず、「マル
 テイン・ルター博士によってドイ
 ツ語に訳された聖書」というタイ
 トルのまま各地で出版されたの
 で、その意味ではルター聖書が広
 まったと言える。ここでいう「ド
 イツ語に訳された聖書」とは「民
 衆の言葉に訳された聖書」という

Es begab sich aber zu der zeytt/das eyn gepott von dem keyser Augustus aus gieng / das alle welt geschetzt wurde / vñ dise schezung war die aller erste / vnd geschach zur zeytt / da Kyrenios landpfleger yn Sirien war / vñnd es gieng yder man das er sich schezten lies / eyn iglicher yñ seyne stad. Da macht sich auff / auch Joseph vñ Gallilea / aus der stad Nazareth / yñnd das Jüdisch land / zur stad David / die da heyst Bethlehem / darumb dz er von dem haufse vnd geschlecht David war / auff das er sich schezē ließe mit Maria seynem vertraweten weybe / die gieng schwanger.

資料4 「聖ルカによる福音」第2章 (Wittenberg, 1522)

Es begab sich aber zu der zeit / das ain gebot von dem kaiser Augustus auß gieng / das alle welt geschetzt ward. Vnd dise schezung was die aller erst / vnd geschach zur zeit / da Kyrenios landpfleger in Sirien was / vnd gieng jederman / das er sich schezten ließ / ain jeglicher in sein stat. Da machet sich auff auch Joseph von Gallilea / auß der stat Nazareth / in das Jüdisch land / zur stat David / die da haist Bethlehem / darumb dz er von dem hauff vnd geschlecht David was / auff das er sich schezten ließ mit Maria seynem vertraweten weib / die gieng schwanger.

資料5 「聖ルカによる福音」第2章 (Augsburg, 1526)

意味であろう。

ルター聖書の受容で、もう一つ重要なことは、高地ドイツ語版では語彙集が付録している点である。綴りや語形をそれぞれの言語に合わせて修正したとしても、そもそも語彙がその言語に無いものは理解しようがないので、語彙集によって読み替えられるようにしたのである。それゆえ、ルター聖書の受容とルターの言語の受容は分けて考えなければならぬ。

ここで、ヴィッテンベルク版と他の都市の版をいくつか並べてみよう。

Das II. Capitel.

Es begab sich aber zñ der zeit dz ein gebott von dem keyser Augustus vff gieng, das alle welt [†] geschetzt würde/ vnd dise schatzung war die aller erste/ vnd geschach zur zeit/ da Kyrenios landtpflegger in Syrien war/ vnd es gieng yederman dz er sich scherze lief/ ein yeglicher in seine statt. Damacht sich vff

sich vff auch Joseph von Galilea/ vff der statt Nazareth/ in das Jüdisch land/ zur statt David/ die do heist Bethlehem/ darumb das er von dem huf vnd geschlecht David war/ vff das er sich scherzen lief mit Maria seinem vertraweten weybe/ die gieng schwanger.

資料6 「聖ルカによる福音」第2章 (Straßburg, 1524)

Es begab sich aber zñ der zyt das ein gebott von dem Keyser Augustus vffgieng das alle welt [†] besetzt wurd/ vnd dise schatzung was die aller erst/ vñ geschach zur zyt/ do Kirenius lād pflegger in Sirien was/ vnd es gieng yederman das er sich scherze lief/ ein yetlicher in sin statt. So macht sich vff ouch Joseph von Galilea/ vff der statt Nazareth/ in das Jüdisch land zur stat Sauids/ die da heist Bethlehem/ darumb das er von dem huf vnd geschlecht Sauids was/ vff das er sich scherzen lief mit Maria sinem vñmächtlen wib/ die gieng schwäger.

資料7 「聖ルカによる福音」第2章 (Zürich, 1524)

dāl fi z̄v̄ ir pharrari chomin.

(daz fi z̄v̄ ir pharrari chomin.)
「彼らが司祭のもとに来ること。」

資料8 Speculum ecclesiae, 編著者不詳、ドイツ南西部、12世紀。Bl. 3r.

Vn̄ dar z̄v̄ sínes selbes wer.

(Vn̄ dar z̄v̄ sínes selbes wer.)
「そしてそれに対する彼自身の守り。」

資料9 Willehalm, 編著者不詳、QuedlinburgあるいはHalberstadt周辺、1270年代。Bl. 2.

Vnser w̄inḡirto ift in bluôte.

(Vnser w̄inḡirto ift in bluôte.)
「我々の葡萄の枝は血塗られている。」

資料10 Ephetaphium, Williram von Ebersberg, Ebersberg, 12世紀初頭。Bl. 21r.

アウクスブルク版やシュトラースブルク版、チューリヒ版には、ヴィッテンベルク版には見られない f の書記が見られる。この書記は f と o の合字で、多田(2011)の調査で、中高ドイツ語の音素である $/\text{fo}/$ に由来することを指摘している。この書記は、一六世紀においては、特に、アレマン語圏で頻繁に表れる。その初出時期は不明であるが、既に一二世紀にはその使用が確認され、特に南部に限らず他の地方でも同様に確認される。

ただし、常に $/\text{fo}/$ が f と表記されていたわけではなく、 fo も同様に見られる。

一七世紀になると f の使用は低地アレマン語圏においても見られなくなり、その代わりに f が用いられるようになる。 f の表記は高地アレマン語圏であるスイスでは一七世紀以降もしばらく用いられた。このことは新高ドイツ語の特徴である新しい二重母音が低地アレマン語圏まで定着したことを示している。

他にも、シュトラースブルク版とチューリヒ版では f や fo といった中高ドイツ語の特徴を示す書記が観察される。さらに、

Anzeigung außlendisch er wörter auff hoch teutsch.	A	Bewüß Beylag Blehen Blasstückerey Blöbling Brachtig Braussen Büssen	erkant/erfahren vertrawē/hindgelegt hochmütig/sin (güt böf/tüchtich/listig gehling/schnelliglich hochmütig/hochfer- rauschē/sausen (tig mercken/erkennen
Affterreden Alber Altuärtelich Andis Anfal Anfür Anstos Auffschub Auffruckē	nachreden nerisch/fanteschisch fabel /alter v̄ber mer morgenessen (lin anteil/loß/züfal der schiff anlandung ergernüß/strauchlūg verzug verweisē/beschuldige	Darb Darben Deutlich Dürstig	notturfft/armüt not/armüt leyden offentlich/mercklich lect/kün
Bang Beben Bestragen Bestremden Beuchung Beschicken Bestrecken Besudlen Betaget Betrowben Betrarwē Betretten Betringen	B angst/zwang/gedrēng bidmen zäcken/zwitrechtig sei. verwundern vabung begrüben/volgtē/be sahen/binden.(statten verunreinē/beflecken alt/harvil tage trückē/krafftloß machē verbieten/trenwen radtschlagē/vn̄reden tūngen mit mist	E Empöden Entamen Enlich Entwandt. Erbshichter Erdbeben Erbhaschen Erdten Eregen Ersausen Eyffer Eyttel	erhöben/streusen entrummen/entlieffen gleich entzogen/entwert erbtaler/erbscheider erdbodem erwischen/sahen schneiden entporen/vffr̄at mach ertrincken (at ernst wan/lat/vnnütig

資料 11 「語彙集」(Straßburg, 1524)

チユーリヒ版では *ouch* や *linem*, *wh* といった書記もあるが、他の版には無い。これらのことは中高ドイツ語から新高ドイツ語への過渡的な濃淡をよく示している。

語彙集については、資料 11 (シュトラースブルク一五二四年版) と資料 12 (アウクスブルク一五二六年版) を参照されたい。資料 11 では「外国語の単語を高地ドイツ語で表したもの」というタイトルが付いている。つまり、シュトラースブルクの読者にとって、ルター聖書のドイツ語は外国語と見なされていたということである。資料 12 では「いくつかの単語を我々の高地ドイツ語で説明し解説したもの」というタイトルが付かれている。ここでは外国語とは呼んでいないが、それでもアウクスブルクの読者にとってルター聖書のドイツ語がそのままでは理

解できないことを示している。

語彙集の最初に挙げられているルター聖書の単語は *afterreden* である。これは「悪口を言う」という意味であるが、アウクスブルクやシユトラースブルクの読者には理解できない単語であって、この語が *nachreden* とい

Weltlicher wörter erklä
rung vnd auflegung auff
vnsere hoch teutsch.

A

Afterreden	nachreden
Alber	nerrisch/fantestisch
Anbiss	ain frůstuck
Anfal	antail/loß
Anfure	der schiff anlung
Anstoss	ergernus/ain böß beispil
Alteuettelisch fabel)	alter weiber merlin
Auffschuß	verzug
Auffrucken	verweisen/Beschuldigen
Außgerottet	von d rot abgesundt/aufge- (gereut

B

Bang	engstig
Beben	bidmen
Befragen	zandten/zwirrechtig sein
Befrembden	verwunderen
Berewen	raffen/rhien
Beruckung	fahung
Beschickten	begrüßen folgten/Bestatten
Bestricken	fahen/binden
Besudele	verunraimen/beflecken
Betaget	alc/hat vil tag
Beteuben	erucken/enerüste /schelig ma
Bedrewen	verbieten/drewen (den
Betretten	ratschlagen/vnderreden
Bechingen	tunden mit mist
Bewise	erkant/erfaren

資料 12 「語彙集」(Augsburg, 1526)

Die begaff syck duerck to der tyd/dar ein bort van dem Keiser Augusto vthgingck/
 dat de gantze werlt 4 geschatter worde. Vnde desse schattinge was de alder er-
 ste/vnde sach tho der tyde/do Kyrenios Landpfeleger in Syrien was. Vnde y-
 derman ginch hen/dar he syck schatten lere/ein yder in syne Stadt. Do maefde
 syck oec Joseph vp vch Galilea/vch der Stadt Nazareth/in dar Jödische lande/
 na der Stadt David/debe hert Bethlehem/darumme dat he van dem huise vñ
 geslachte David was/vp dar he syck schatten lere mit 4 Marien syner voirtuweben vrouwen/
 dede swanger was.

資料 13 「聖ルカによる福音」第 2 章 (Lübeck, 1533)

Esbegab sich aber zu der zeit/Das ein Gebot von dem Keiser Au-
 gusto ausgieng/Das alle Welt geschert würde. Vnd diese Schaz-
 ung war die allererste/vnd geschach zur zeit/da Kyrenius Land-
 pfleger in Syrien war. Vnd jederman gieng/das er sich schenken
 lieffe/ein jglicher in seine Stad.

Da machet sich auff auch Joseph/aus Galilea/aus der stad Nazareth/
 in das Jüdischeland/zur stad David/die da heisse Bethlehem/Darumb das
 er von dem Hause vnd geschlechte David war/Auff das er sich schenken lieffe
 mit Maria seinem vertraweten Weibe/die war schwanger. Vnd als sie da

資料 14 「聖ルカによる福音」第 2 章 (Wittenberg, 1545)

う意味であることが記されている。現代標準ドイツ語におい
 ても用いられるのは *nachreden* であり、ルター聖書で用いられ
 た *auffreden* は現代標準ドイツ語に残っていない。あるいは、
 ルター聖書の *Anstoß* に対して、シュトラースブルク版では
ergermis が、アウクスブルク版では *ergermus* が当てられている
 が、これは現代標準ドイツ語で *ergermis* と表記され、術語とし
 て「躓き」を意味する。ただし、*Anstoß* も現代標準ドイツ語
 に残っているが、こちらには「躓き」という意味はなく、一般
 名詞として「突くこと」や「障害」といった意味である。

次に、ブーゲンハーゲンがルター聖書から低地ドイツ語に翻
 訳したリューベック版を資料 13 として挙げる。これはルター
 聖書からの重訳であるので、それぞれの文はかなり対応して
 いる。当然、書記は低地ドイツ語になっているので、ルター
 聖書とは全く異なる。単語についても、例えば、ルター聖書
 の *Weibe* に対して、リューベック版では *frouwen* (現代標準ド
 イツ語の *Frau* に相当) と訳されており、中高ドイツ語や中低
 ドイツ語で「貴婦人」を意味した *vrow* が、ルター聖書におい

て一般的な女性を意味する weib に置き換わるまでには時間を要したのに対し、リユーベック版ではこの時点で既に置き換わっていることがわかる。現代標準ドイツ語では Weib は雅語としてか、あるいは、逆に、卑語としてしか用いられず、一般的な女性を意味するのは専ら Frau であるが、ルター聖書では少なくとも一九世紀まで Weib が残り続けていたのである。Frau と Weib については、塩谷（1975）が論じているが、これは、日常言語として、もはや Weib を用いなくなつてからもルターが当時の文脈においてルター聖書で用いた Weib と Frau の使い分けを尊重して、あえて残されていたのである。

七 結論

ドイツ語が現在の標準ドイツ語という形に至つたのは、ドイツ語史の流れに沿つて言えば、一九世紀末から二〇世紀前半のことであり、それまでは、なお、複数の「ドイツ語」が並存した状態であつた。ルター聖書は確かにドイツ語史においても大きな出来事であることは間違いないが、それは文字の「着せ替え」や語彙集の付録、重訳などによって複数の言語圏に広がることができたのである。そこには印刷業者や植字工が大きく関わっており、著作権など無い時代においては出版地ごとに独自の版が出されることは珍しくなかつたのである。それゆえ、ルター聖書の伝播とルターのドイツ語の伝播とは分けて考えなければならぬ。また、ルターに対する敬意のゆえに、もはや言語実態に合わなくなつたものをあえて残すといったこともなされ、それは、言い換えれば、

ルター聖書のドイツ語が言語実態にあらゆる影響を与えたのではないということを傍証している。ホルツナーゲル (Holznagerl, 2016) は、ルターの言語使用自体は中東部ドイツ語の慣習に従ったものであるが、ルターが新しく導入したり、新しい意味を付加した語彙が複数あり、そのことはその後の神学に大きな影響を与えたと評価している。そのような語彙の中には、Blutgeld「血の対価」、Feuerifer「熱心者」、Landpfleger「総督」などの新しい語彙があり、また、evangelisch「福音主義の」、Buße「悔い改め」、Rechtfertigung「義認」、Beruf「職業」などには新しい意味を付加した。ただし、Besch (2014) は、このような語彙も近代に至るまではプロテスタント側でのみ通用するものであり、プロテスタント方言というべきものと指摘している。Besch (2014) は、これまでの「言語の創造者」としてのルターは過大評価であるとする一方で、ルターの果たした役割を過小に評価することも避けるべきであると述べている。むしろ、ルターのドイツ語をドイツ語史の中で客観的に評価することが、ルター神学の研究にとって有用なことである。

参考文献

- Besch, W. (1999): *Die Rolle Luthers in der deutschen Sprachgeschichte*. Heidelberg.
—— (2014): *Luther und die deutsche Sprache*. Berlin.
- Fleischer, W. (1966): *Strukturelle Untersuchungen zur Geschichte des Neuhochdeutschen*. Berlin.
- Fritgs, Th. (1957): *Grundlegung einer Geschichte der deutschen Sprache*. Halle (Saale).
- Holzangel, F.-J. (2016): „Luther und die deutsche Sprache“, in Käßmann, M. / Rösel, M. (Hg.) (2016): *Die Bibel Martin Luthers*. Leipzig.
- König, W. (1978): *Deutsche Sprache*. München.
- Lexer, M. (1885): *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*. Leipzig.
- Wegera (Hg.) (1986): *Zur Entstehung der neuhochdeutschen Schriftsprache*. Tübingen.
- Stimmler, F. (1981): *Graphematisch-phonematische Studien zum althochdeutschen Konsonantismus*. Heidelberg.
- Wolf, H. (1980): *Martin Luther*. Stuttgart.
- 河崎靖 (2007) : 『ドイツ語学への誘い』現代書館。
- 工藤康弘／藤代幸一 (1992) : 『初期新高ドイツ語』大学書林。
- 小島公一郎 (1964) : 『ドイツ語史』大学書林。
- 齊藤和史 (2010) : 「植字工が愛用した『余計な』活字―16世紀末の印刷語における表記異種の使用をめぐる」『ドイツ文学』一四〇巻、日本独文学会、四一―五九頁。

塩谷饒 (1975) : 『ルター聖書のドイツ語』 クロノス。

多田哲 (2011) : 「16世紀ドイツ南西部における書記法の問題」 学位論文 (修士)、京都大学大学院人間・環境学研究科、
一〇頁。

藤井明彦 (2009) : 「初期印刷本の植字法について—アウクスブルクのギュンター・ツアイナー工場の例」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 第55輯、第2分冊、一七—二七頁。

森澤万里子 (2008) : 「16世紀ニュルンベルクの印刷事情—都市言語とメディアの関係を探る予備的研究」 『ドイツ文学』
一三六巻、日本独文学会、八五—九九頁。